不定期刊行　　第645号　2018.04.04

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

雪崩サーチ＆レスキュー講習会に参加して

前々号で紹介した「雪崩サーチ＆レスキュー講習会」に参加してきた。参加者18名の多くは山岳ガイドなどであったが、長野県の高体連登山部専門委員長と僕が高校山岳部関係者だった。講師のゲンシュワイン氏はスイス在住で、マムートの雪崩トランシーバー（いわゆるビーコンのことだが、欧米ではこう呼ぶのが一般的なようだ。ここでは以下もビーコンと表記）の技術開発に携わっている雪崩サーチ＆レスキューの第一人者、サブ講師はカナダ在住のスキーガイドの藤村知明氏。いずれも国際山岳救助委員会（ＩＣＡＲ）のメンバーである。僕はどうしても都合がつかず、2 日間のみの参加になってしまったが、それを受け入れてくださった実行委員会の皆さんに感謝したい。

ゲンシュワイン氏はビーコンの開発者であるだけにその説明は深い。そしてそれを使ってのサーチ＆レスキュー技術も最新のものだ。かわらばんで紹介しようにもその内容が高度かつ多岐にわたりすぎていて、難しい。ただ、これまではビーコンの導くままに導かれていけば捜索は可能であるという受け身のサーチであったのだが、今回の講習会の中で、真っ先に目から鱗が落ちたことは、氏の口にした「ビーコンをドライブする」ということの意味であった。「ビーコンをドライブ」とは、言い換えれば、ただビーコンに導かれるのでなくて、ビーコンや電波の特性を理解してより積極的・能動的にビーコンを使いこなすということになろうか。電波特性を理解したサーチは、送信機を管制塔に、受信機を飛行機にたとえ、「エアポートアプローチ」と命名されていたが、送受信機をカップリングさせることで、まさに飛行機が空中から一本の滑走路に向かって降りていくイメージとして胸にストンと落ちる比喩であった。エアポーチアプローチでは、シグナルを受信した段階から10mまでを「シグナルサーチ」、10mから3mまでを「コース（粗い）サーチ」、3mからは「ファインサーチ」と呼び、最初はスピード感をもって、最後は正確性を重視することが大事であるということだった。

入山前のビーコンチェックについても、理由はここでは省略するが、1 台ごとのビーコンが正確に動いているかをチェックするためには、3mの間隔をとることが大事だということも改めて知らされたことであった。

そしてこれまで学んだことのなかったのが「マイクロサーチストリップ」と「マイクロボックス」という捜索方法であった。これらは複数の発信ビーコンが極めて近接した位置にあって、マーキング機能をうまく使えなかった場合の捜索方法である。まだ完璧には理解できていないが、その理屈はなんとなくわかった。

ビーコンでのサーチができない場合のプロービングの技術や、サーチ後のシャベリングについても効果的な方法が紹介された。今回の講習会は、「マニュエル・ゲンシュワインによる最新メソッド」という副題のもとに行われたものである。今回紹介された方法は、常に更新されており、現在考え得る最も有効な方法であるとのことである。たとえば、シャベリングの技術は、北海道の佐々木大輔さんらが考え出した技術が採用されたということが紹介されていたが、このことが示しているように新たな有効な技術に対しては、非常に柔軟な考え方をもって構築された掛け値なしの「最新メソッド」であった。

大町岳陽高校　春山合宿ＩＮ乗鞍

3 月 29、30 の両日、生徒とともに乗鞍岳に向かった。29 日は、10 時、登山口について「さあ、ビーコンつけろ。」と言ったときのことだ。装備担当のKが絶句した。一瞬間の後、「忘れました」と一言。予備に一台は持っていたが、全員分となるといかんともしがたい。往復 140 ㎞の道を取りに戻った。結果からしてもビーコンはなくても問題はなかった。しかし、９９%安全であっても、ビーコンなしで入山するわけにはいかなかった。生徒たちも去年の那須の事故は当然承知しているし、僕自身が調査委員であったことも強く刷り込まれている。原則的に行うことが事故のリスクを軽減する。

予定より 3 時間近く遅れた 13 時前にようやくリフトに乗り込んだ。すでに登頂を終えて、下ってくるパーティを横目にゲレンデトップを後にした。最初の急登を登りあげたところで、一本入れる。遅れた分を取り戻そうとペースをあげて、幕営地を目指す。ここ数日の好天で雪は締まっている。15 時位ヶ原下部の 2320m付近に到着。斜面にプローブを挿してみると、底まで届かない。雪の量は例年より少ないと思っていたが、そうでもない。これなら立派な雪洞ができると、さっそく雪洞掘りにとりかかった。2 年生は雪洞を掘るのは 2 回目。昨年のことを思い出しながら、1 年生を指導。横穴を掘り進んでいく。ところが、思った以上に雪が締まっており堅い。完成までに 2 時間半を要した。しかし、今回の雪洞はほぼ満点に近い出来だった。

翌日は 5 時起床。6 時半に出発。最初はワカンと山スキーでの登高訓練。しかし、放射冷却で雪が堅い。そこで、ワカン組はアイゼン歩行へと切り替えた。山スキーは位ヶ原へ登る急斜面ではスキーを外さざるを得なかったが、位ヶ原から肩の小屋までは、何とかシール登高ができた。青空には一点の雲もない。風も弱く、雪崩の危険もない。ここからは、アイゼンとピッケルのコンビネーション訓練ということで、全員にアイゼンを装着させ、ピッケルをもってさらに上を目指した。朝日岳をトラバースしながら蚕玉岳の頂上を経由、剣が峰まで登った。山頂を巻き込んで、南側に出ると無風でむしろ温かい日差しが優しく感じられるほどであった。360 度何遮るもののない、剣が峰で山岳部歌を歌い、2017 年度の山行を締めくくった。所期の目的を十分に果たすことができる有意義な訓練となった。

編集子のひとりごと

あの悲しい事故から 1 年目にあたる 3 月 27 日栃木県主催の「那須雪崩事故追悼式」が事故現場に臨んだ「県立なす高原自然の家」にて執り行われた。今年の那須岳は昨年とは異なり、斜面にはところどころ地面も覗く少雪だった。事故の当事者、関係者それぞれの人がそれぞれの思いを持ち、複雑な気持ちがあるのは当然だ。私自身もどのようなスタンスで臨めばよいのか、複雑だったが、検証委員に名を連ねた一人として、追悼の気持ちを示したいと思った。抜けるような紺碧の空が一層悲しみを深くした。8 人の命は戻らない。追悼式に対しても様々な考えがあることを突きつけられた。決して消すことのできないものが大きな重石となってのしかかってくる辛い式だった。（大西　記）